

編集後記

21世紀を迎え平成13年1月から本誌の紙質を変更し、3号目になりますが、図や写真の出来具合は如何でありましょうか。また、国際化に対しては、本誌を欧文化するより既存の外国誌と collaborate する方向で、Digestive Surgery との契約も進み、間もなく学会機関誌として登場します。購読料を支払い済みの会員も多いかと存じますが、欧文誌への投稿の方も宜しくお願い申し上げます。なお、邦文誌は若手会員の登龍門として今後も従来と通り継続しますが、原著重視方針で査読の一部を編集経験者のOBにも依頼することになりました。特に、学位論文に関しては、査読を優先して行う方針でありますので、加筆・修正論文に対しては早急な対応を頂ければ、掲載までの期間が短縮可能であります。是非ご利用・ご期待頂きたいと思えます。

さて、34巻3号を本日お届けしましたが、原著4編、症例報告18編で原著の占める割合は依然として低率でありました。しかし、症例報告は一般病院からが7割近くを占め、実地臨床で日夜活躍中の若手会員の登龍門としての役割は、若干なりとも果たしているものと自負しております。また、管腔臓器と実質臓器の比率は11題と9題でほぼ均等が保たれておりましたが、症例報告の内容は単に「まれな症例」故の採用論文が多く、将来的には頭打ちになる可能性が危惧されます。会員諸氏には自験例に対し常に探求心を高め、「+α」の展開ができる論文を作成頂き、特色ある内容として仕上げて頂ければ採用率も向上し、本誌の格調がさらに高まるものと考えています。その意味で、日常臨床においても常に探求心を持って治療に当たって頂ければ、消化器外科全体のレベルアップにも繋がり、学会誌としての役割と存在意義が保障されるものと考えています。

ところで、21世紀は情報過剰時代で、公開された多くの情報洪水のなかで、本誌も会員の皆様に折角お届けしても、そのままごみ箱へ投函されてしまう可能性が高くなるのではと危惧しております。新しい時代には、資源節約の意味でも、学会機関誌をネット上で公開し、会員には年1回CD-ROM化して配布する方が、利便性が高いかも知れません。

(佐治重豊)